特集 21世紀を構想する視座（下）

戦後日本のポップ・カルチャーと労働政治

篠田　徹
早稲田大学社会科学部教授

1 丸山眞男の「執拗低音」

私は丸山眞男さんを肉眼で見たこともなければ、その肉声を聞いたこともないし、恥ずかしながらまじめに本を一冊読み上げた覚えもないのですが、先日おふくろが読んでいた本を奪い取ったら、それは文春新書で『丸山眞男　音楽の対話』という、ノンアカデミックな丸山学派の1人で音響関係の会社に勤めて今は音大の先生もやっている人が出したものでした。私は丸山眞男さんについて、特にプライベートなことについては一切知らなかったので、その本を読んでみて大変おもしろかったんです。そこには丸山眞男さんがいかに音楽について深い愛情と熱意を注いだか、しばしば原稿を書くのをやめてでもそちらにエネルギーを向けるぐらいの、趣味と仕事という分け方では言えないほどの熱の入れ方をしているのを知りました。

実は10年前に亡くなった私のおやじはしがない物書きをやっていましたが、余業で音楽批評もやっていた。丸山眞男さんとたまたま同席する機会があって、その時に丸山さんからフルトヴェングラーについて聞かれたという話をしていました。私は、そのときには、丸山さんが音楽についてそれほどまでに造詣が深いということを知らなかったものですから、へーえ、なんでかねえという思いがあったんですが、今回その本を読んで非常によくわかったと同時に、私が丸山さんのアイデアの中で一つ思い出があるのは、日本の労働運動を勉強していたり、あるいはかつてオーストリアのコーポラティズムを研究していたときに、世の中にはなかなか目に見えないけれども、時代を超えて、人を超えてずっと奥のほうで変わらないものが流れているんじゃないかということを思っていたんです。そんな話をおやじにしたら、「それは丸山眞男がずっと昔に『執拗低音』という形で日本の政治思想を語っているよ」と言われて、おれは丸山眞男と同じことを考えていたのか、という深い感動を覚えました（笑）。

複雑な思いでしたが、その部分だけは以前読んだ覚えがあります。今回その文春新書を読んだときに、ちょっとしたアイデアから「執拗低音」を出してきたのではなくて、ミュージコロジーの中には「執拗低音」についてもいろんな種類があるし、いろんなヴァリエーションがあるし、そういうことをすべてわかった上で、丸山さんはこの場合は「執拗低音」だと言ったというのを読んで、なるほどなあと思いました。私が丸山さんの方法論として学んだのは、一つの問題を探るときに、それがたとえあるディシプリンであったとしても、

筆者紹介

篠田　徹（しのだ とおる）
1959年　東京に生まれる
1981年　早稲田大学文学部（中国文学）卒
1987年　早稲田大学大学院政治学研究科博士課程中退。
北九州大学法学部専任講師、早稲田大学社会科学部助教授を経て、現在、同教授。
専攻は比較労働政治。
著書に『世紀末の労働運動』（1989 岩波書店）「再び“ニワトリからアヒルへ”？」（1996『年報政治学 55年体制の崩壊』）“Rengo and Policy Participation” Sako&Sato eds, Japanese Labour & Management in Transition, 97 Routledge など多数

別のディシプリンや別のところから、あるいはあまりディシプリンにかかわりなく、自分がこれとこれは一緒だな、あるいはこれとこれは同じ問題を語っているんだなと思ったときにはそれを進めたほうがいいんだな、という点です。それは丸山さんがやるからいいんで、おまえがやったら何の意味もないと言われるかも知れないけれども、そういうことを非常に感じました。そういう感覚は、最近政治学というよりは労働運動や労働問題を考えるときに、今までのディシプリンや枠組みで議論をしていても、学者の人とはもちろんのこと、とりわけ現場の人と話してもらちがあかない際に強く出ました。結局ため息で終わってしまう。非常に閉塞感、前に話が進まないという、これは現実がそうだという以上に、使っている言葉や使っている理論体系がなんかもう一つだな、と数年間思っていました。

2 隠れた巨人たち

この2年間は外国にいたんですが、その前に私は地方をよく回りながら労働組合のことを調べていました。今日の研究会のゲストである金属機械労組書記長の小山正樹さんのお話を聞きながら、機械金属はほかの産業とは違うということをその調査のときに非常に実感しました。今日配られたJAM(注)のパンフレットに構成組合の名前が書いてあります。たぶん皆さんこの中で知っているのはわずかだと思います。しかし、これらは日本の産業の中でも隠れた巨人たちです。

10年前ぐらいにフリードマン(David Friedman)の*"The Misunderstood Miracle"*という日本の産業を論じた本が出ました。ミネルヴァ書房から丸山恵也さんが『誤解された日本の奇跡』という翻訳で出版されました。当時、マイケル・ピオーレ(Michael Piore)というアメリカのMITの学者たちが、大量生産に代わる新しい地域主義に基づいた柔軟な生産体制の議論を提起し出していました。一つの例としてはイタリアのサード・イタリアと呼ばれるローマの少し上のロンバルディアの中小企業が、世界的な競争力を持っているのはなぜか。あそこはイタリア共産党の牙城だが、もう一方で中小企業のおじさんたちが大変なネットワークを組んで、地域のネットワークの上に競争力をつくり上げている、という議論を展開した。それはある意味ではジャパン・アズ・ナンバーワンに対する、とりわけ当時アメリカは「やはり日本に学べかな」と思っていたときに、アンチ・テーゼとして、いやいや、こういうやり方もあるんだよというのを提起してきた。

いっぽう、日本でもジャパン・アズ・ナンバーワンの議論だけではなく、こういう事例もあるんですよと言って、例として出されてきたのが機械金属の世界です。具体的に、フリードマンは長野県の坂城町という小さな町で、世界でも通用するような機械メーカーが集積していることを取り上げた。ここのおやじたちは単価切り下げに強硬に突っ張っていました。もちろん大企業は単価切り下げを要求してくるが、彼らは自信があるわけです。「いやならほかに行ってみな。うちの製品に代わるだけのものがほかにあるかね」と。実際にないんです。実はこのパンフレットに載っている会社は皆そういう会社です。カンバン方式に乗っかっていない。そして非常に競争力がある。ただし、最終製品として私たちの目の前に出てくるものは少ない。

例えば機械関係でいうと、不二越があります。これは富山にある会社で、ベアリングの世界的なメーカーです。ここのベアリングを積んでいないで回す製品はまずないだろうと言われるぐらいの非常に競争力の強い会社です。あるいは津田駒工業、これは金沢にある自動織機です。これも世界の巨人です。これらの会社を全部調べていくと、一つの拠点は北陸、もう一つは愛知の南のほう、あるいは大阪です。名古屋にしても大阪にしてもでっかい会社がある工業地帯です。沿岸の工業地帯ではなくて、内陸部です。全国金属の拠点は大阪、特に東淀川の中小の工業地帯です。東京でいうと蒲田です。こんなところにそんな競争力のある工場があるかねと思うような本当に中小企業の町ですが、そこには一時「全金横丁」と言われたように、横丁全部を全国金属が組織していた。20

人とか30人の小さい工場ですけれども、春闘になると赤い旗が横丁全部にパーッと立つんです。

先ほど小山さんの話に対する質問の中で、関経連は中央の経済団体と違う経営思想を持っているのではないかということが出ましたが、私は関西が労使一体でというのには一つには歴史的な理由があると思います。全金、全金同盟、両方ですが、地域における強力な労働運動が存在して地域に根を張っていた。大阪の経営者は一時躍起になってこれをつぶそう、あるいはこれに対抗しようと思って東京から応援団まで呼んでやったことがあります。彼らにとっては労使関係は厳しいものとしてあるわけです。今ではある意味では地域再建のために手を結ぼうということになっているわけですが、労使一体という枠組みは、いいにせよ悪いにせよ、彼らには歴史的に非常に刻み込まれていると思います。

3 機械金属労働運動の盛衰と再生 ——

レジュメに「裏日本」の労働運動と書きました。先ほどの議論で伊藤光利さん（神戸大学）の大企業労使一体の話が出ましたが、上から俯瞰して目の前にある大きな会社だけを見れば、それを一つの日本というナショナルの枠の中だけで統計的に見れば、伊藤さんが言われるとおりでしょうけれども、もう少し地域的に分けたり、あるいは空間的に分けたり、産業構造的に分けると、そんなに簡単な話ではない。一方で大企業のカンバン方式のものがあると同時に、それを支え、かつ支えながらそれと対抗する形で中堅の強力な企業が存在して、そこではまた違った労使関係が結ばれていた。そこが集積していたのが地理的にも「裏日本」ですし、空間的にも同じ大阪や東京や名古屋でも大企業が集積しているところではなくて、別の地域です。50年代から60年代までむしろそちらのほうがメジャーでした。労働組合員数や労働者数を見ても、福岡、北海道などは炭鉱があったからトップ5に両方とも入っていたと思います。それが60年代の人口大移動で一気に変わってきたり、あるいは新産業都市をつくられて新しい産業構造や労使関係がつくられる中で、むしろ「表日本」といわれるほうが実態的にも出てきた。

ところが、80年代になってきて、さきほど言ったような大量生産から多品種少量とか、地域主義という話が出てきたんです。再びこれらの企業が見直され、金属機械がつくられた背景にも75春闘以来、大企業から賃上げ抑制はもちろんのこと、単価も引き下げられてきたという状況があった。ある意味では労使双方とも、これはたまらんな、もう一つポイントをつくらないとやってられないなという思いがあって、今までの政治的な対立を超えて一つの極をつくったのが連合の労戦統一のもう一つの裏面史だったのです。これはほとんどどこにも書かれていないし、小山さんたち以外は言わない話ですが、地方を回っていくと事実です。というのは、富山駅におりると駅の左側には不二越の大きな工場があります。新潟駅におりても信濃川の河口は新潟鉄工の大きな工場です。こういう企業は地方では大企業だし、ここがある意味ではコアになりながら地域経済を支え、その中で地域政治や地域社会の人的配分まで含めて行われているわけです。我々は大企業、特に東京本社、大阪本社だけしか見ていませんが、やはり地域に行けばこういう構図がある。その声が連合の中で少しずつ少しずつ強まっています。

先ほど官公労の話も出ました。官公労は地域に行くと大企業です。ホワイトカラーです。ある意味で異質な人々です。東京や大阪の大学に行って帰ってきた人たちですから、地域とは一たん切れているわけです。政治的には民間大企業と対立するかもしれないけれども、地方に行けば官公労の人たちはむしろ民間大企業と一緒と見られてもしょうがないような歴史的な経緯がある。だから労働運動あるいは労働組合論といっても、あるいは労働政治ともっと広げたとしても、いろんな見方があり得るだろうなと思います。そういうふうにいろんな見方をしていかないと、さっき言ったような議論の閉塞感が破れないなというのが

初発の思いです。

4 戦後日本のポップカルチャーと労働政治

(1) 問われるコレクティヴィズム

今日の私の報告の本題は「ポップカルチャーと労働政治」ですが、UI体験、ユニオン・アイデンティティという議論がバブルの前後にずいぶんはやりました。連合も新しい労働運動をめざそうといって赤い旗を青い旗にしたり、あるいはある側面から見れば連合の政治方針の漂流は、このUI、労働運動というのは何で、労働運動にとって政治とは何なのかというところを右往左往した結果だとも言えます。なぜ細川政権樹立前夜に労働組合の幹部たちが一斉に反自民で結集して立ち上がったか。ついこの間まで「いやぁ、自民党さんもね」みたいな穏健なことを言っていた幹部が、いきなり連合になって反自民のこぶしを振り上げたか。いろいろ客観条件を考えても、やっぱり説明がつかないところがある。たぶんあのときに、労働運動は、労働組合は何だろうというのを考えたんでしょうね。あるいはやっぱり自分たちがもう一回前に出なきゃという思いもあったでしょう。いろんなことがあったと思います。

もう一方で労組離れというのが背中合わせであります。UIを探したのは、若い人たちを中心にみんながいなくなった、もう一回引き戻したいという思いがありました。ただし、これもインディヴィジュアリズム（個人主義）の問題に係るのですが、企業別で行くか、産業別か、職業別かという労働組合内でよく昔からの議論されたテーマですが、私はそのもう一つ前の段階、つまりコレクティヴィズム（集団主義）自体が問題になっているのではないかと思ったわけです。

問題が起きたときにみんなで集まって一緒になって解決するという考え方あるいは行動様式それ自体が、数年前にUIの調査をしたときでもかなり落ちていました。これは組合だけの問題ではない。よく小学校で言われるPTAが成り立たないという問題、みんなで共有している問題はみんなで片づけようという発想や行動方式をもうとれなくなっているということはどこにでもあるわけです。このコレクティヴィズムの問題が既に数年前から表面化していた。今一層その問題が出ていると思います。みんなで一緒に考えて問題を解決するという作風をどうやってもう一回つくることができるのかと考えたときに、これは企業別だ、産業別だという組織論以前の問題だなと思いました。

(2) カルチュラル・スタディーズ

この2年間いたアメリカで悪い友だちにつかまって教えてもらった酒がカルチュラル・スタディーズです。日本でもとりわけ若い社会学者が飛びついているような、映画とかテレビを論じてはこうだ、ああだという話です。ただこれの一つの出元がグラムシだということはあまり言われません。皆さんには釈迦に説法ですが、第1次世界大戦後にマルクス主義者が考えたのは、生産力論、下部構造が客観条件を満たせば革命が来るはずだ、つまり先進国にまず革命が来るはずだという理論だった。しかし実際には革命は来なかった。なぜ来なかったのか。そこからいろいろ議論が始まったわけですが、ルカーチなどは上部構造、意識の問題にその原因を求めた。グラムシもその問題をいろいろ考えた末に、ヘゲモニー論を提起してくるわけです。

日本の政治学ではこのヘゲモニー論を国家論に持っていったのが大勢だったと思いますが、グラムシがこのときに出してきたもう一つはカルチャーの問題です。極端な言い方をすると、条件はそろっているのにそう思わせないで、そこに行かせないようにしている何かがここにはまっているのだろう。それはカルチャーだろう。グラムシは、そのときとりわけアメリカニズムというものを持ち出してきたわけですが、不思議なことに日本ではあまりそのことは議論にならなかった。グラムシアンの本を読んでも、政治学だからかもしれませんが、そのことはあまり出てこない。イギ

リスやアメリカではネオ・マルという形でこれに文学や歴史の人が飛びついたわけです。結局マス・カルチャーをそういう角度から分析しようとしたのです。政治、社会の問題をそれ自体制度や組織の話から入るのではなくて、カルチャーの問題から、それを一つの窓口として、テレビとか映画とか作品の中に埋め込まれている何かの記号やサインを読み込むという作業の中からそういう議論が出てきたのが一つの源流です。

そう思ったときに、私はふと鶴見俊輔を思い出したのです。鶴見俊輔は日本の大衆文化を少し議論をしていました。それほどはっきりとした方法論、はっきりとした政治へのアプローチとして鶴見俊輔がこのことを体系立てようとしたとは私は思いませんが、しかし山口二郎さんの「ガキデカ民主主義」という話とか、かなり示唆深い問題提起があった。彼1人ではなくて、それは「思想の科学」といわれる集団によって一時期よく議論されたところです。決して私たちにとってカルチュラル・スタディーズは西洋からの輸入として最近来たものではなくて、日本でも一度は、やろうとしたことではなかったのかなあと、こういう思いもしております。

(3) 二つの考えのせめぎ合い

こういう考え方に立って、今日の本題の労働の問題に入るわけですが、どこの国でもあざなえる縄のように二つの対抗する考え方がありました。一つは、労働を政治・経済的に定義する。所得がいくらでとか、どこら辺に住んでとか、労働者階級とは何かということを客観的に規定していくわけです。その労働運動は制度的、組織的にどうあるべきかを議論します。この議論の一つの最終地点がビジネス・ユニオニズムといわれるものです。労働組合は労働条件の改善に努めるのが目的であって、それ以上でもなければそれ以下でもない。そのためには労使関係の制度をきちんとつくって、組合の組織はこういうものでという議論です。

それに対して、もちろんバックボーンとしていろんなラディカルなイデオロギーがありますが、労働をむしろ社会的に解釈する。非常に伸縮自在です。どこまで労働者なのかについてもかなり幅広く考えます。これの一つの例は、日本が戦後労働組合ができて最高の組織率といわれた40数%前後を記録していた50年前後です。産業労働別に見ると一番多いのは1次産業です。その次は3次産業です。2次産業はたいして多くない。それが多くなってくるのは高度成長以降の55年以降です。それにもかかわらず激しい労働運動が行われた。ある意味では労働とは何かをめぐって思い切り解釈を広げたと言ってもいい時期です。

同じような傾向はイタリアにも見られます。今でもそうですが、イタリアは農業産業労働者を組織化しようとしました。結局激しい南部の地主支配のために失敗しましたが、ここと結びつかない限りイタリアの労働運動は最終的に解決できないと考えた。北部の産業労働者だけではイタリアの労働運動は成り立たないという、当時ビィットリオという伝説的なリーダーがいて、彼がこれにトライしました。高野実に非常に大きな影響を与えた人です。つまり客観的条件がそろっているからといって、即労働運動が盛り上がる盛り上がらないという話ではない。むしろそのときの構想力、アイデア、社会的なコンセプトみたいなもので噴き上がるときがある。春闘にしても、産業連関、あるいは取引関係をベースにした春闘論はよく言われるが、これが成立するのは60年代半ば以降です。それまでの春闘の賃上げ幅は簡単にいえばそのときの運動の盛り上がりです。安保があれば、あるいは最賃があれば、あるいは勤評があれば、賃金は上がりました。現場ではそれをダブらせて経営者に迫ってゆくわけです。

これはある意味では文化・価値として労働運動を考えるという方法論で、これはいつも制度・組織としての労働運動と激しくぶつかりました。ここでは、労働運動について二つの考え方でとらえています。

A 政治経済的に定義される属性としての労働／制度・組織としての労働運動、

B 社会的に解釈される概念としての労働／文化・価値としての労働運動です。

日本でいえば55年の4単産声明で、Bを進める高野実にはついていけない、Aで行こうということになったわけです。労働運動の一つの定説で当時言われたのは、先進国として社会が成熟化して産業も安定してくれば、必ずAに向う。文化・価値としての労働運動はその社会が未成熟の段階のもので、「小児病」だという言い方で労使関係論が言われた時代があります。はたしてそうかなあと思います。日本では1950年代に、大河内一男と高野との間で論争が行われました。大河内は日本の戦前からの運動は、最初は地道にやるけれども、すぐ盛り上がって、官憲からたたかれて終わる。もうこの悪循環をやめて地道にやりなさいと高野に言ったわけです。高野は「地道に行っていたら、それ以上進めない。大枠を変えなければこれ以上進めないんだ」と反論しました。

5 文化・価値としての労働運動

(1) 再生の可能性

同じことは企業別組合論でも言われたし、UI論議でも言われるし、連合の経験でも言われる。あるいは学者の中でも、大体ラディカルな人たちは労働者を神聖化し過ぎると言います。労働者はしょせん賃上げ、生活をよくしたいだけなんだ、彼らをあおったってしようがないんだよと言う。けれども、一方でこの言い方は労働者をバカにしていることになるわけです。必ずしも労働者にとってそれが「まことにそのとおりです。よくぞ私たちのために言ってくれました」という話でもない。これはいつまでやっても、ある意味では神学論争だと思います。

私は今日の報告で、一つの真理を言おうとも思わないし、合意を得ようとも思わないし、結論を出そうとも思いません。そうではなくて、労働運動とか労働の問題を語るときに、今はその語り口の入り口をいっぱいふやさないと埒が開かないなという私の思いから、ここまで話を広げるやつもいますよという一つの例を出すことで、議論を展開させていただければという思いです。したがって、ここからの話は一つのテストケースです。私は今言った神学論争に結論を出すつもりはありません。ただ一つだけ言えば、制度・組織としての労働運動論に立てば労働の終焉論になります。昔の産業現場ではないのだ、あるいは昔の産業構造ではないのだ、もうコレクティヴィズムの時代ではないのだというふうにどんどん詰めていけば、もう労働運動の時代じゃないのだよということになる。

皮肉にも私は10年前に『世紀末の労働運動』という本を出して、みんなから「おまえは労働運動を終わりにするつもりか」と言われたのですが、別にそういうつもりはなかったのです。たまたま頭に浮かんだだけだと言ったのですが、最近ではだんだん「本当に終わりかもしらんなあ。君は予言者だったかもしらんな」と言われています(笑)。

しかし、もしも文化・価値としての労働運動の立場に立てば再生する可能性はあるんじゃないのかなと考えて、あくまできょうはこの立場で過去を見直して、次につなげていこうという意図です。たいした話が待っているわけでもありません。要は幅広く文化とか価値というふうに労働運動をとらえた場合に、戦後の日本はどうだったんだろうというのを振り返ってみたいということです。

(2) 戦後民主主義文化

▶埋め込まれたDNA?

最近、新聞でガイドラインの話を読んでいましたら、若手右派政治家がはき捨てるように「この国の政治家のDNAには制御装置が埋め込まれている。あるところまで行くと、先に行かない。何をしているんだ」と言っていました。保守・野党ともにある程度まで行くと必ずブレーキがかかる。左バネがかかる。世代論です。最近はマインド・コントロールという言い方もするそうですが、私はこのDNAの言い方のほうがおもしろい。どこかで埋め込まれたんだろう。何か経験をしたからそういうふうになる。もちろん戦争世代は実体

験として刻み込まれています。

例えば私が高校2年の時に75年のスト権ストライキがありました。1週間も国鉄が動かなかった。都立高校に行っていたので、ルールでは休みになる。すごくうれしかった思い出があります。それ以前の問題として、ストライキに対してみんな必ずしも批判的ではなかった。民鉄協というのがあって、そこで労使交渉をしていて、NHKの12時のニュースで、そこで解決していなければストというルールになっていたんですが、アナウンサーが「どうやら組合側が100円もう1枚積んでくれれば、と言っているようです」と言うと、みんな「暁の大脱走だ。ここはストに入らなきゃいかん」と、ダラ幹批判みたいなことを言っていた。何にも知識がないんですよ。周りに労働組合員がいるわけでもなければ、先生は決して日教組のバリバリでもなかった。70年安保の世代でもない。家にそういう人がいたわけでもない。なのにリベラルなことに対してポジティヴに反応した思い出があります。これはだんだん世代を超えて落ちてくるんですが、今やもうガイドラインなどの議論は政策論争ではなくて、お互いに埋め込まれたものが強いか弱いかの闘いじゃないかなと思えるところがあります。

よくある答えは「日教組の偏向教育だ」というのですが、もう私たちのころは日教組はそんなに強くなかった。現場でそういう教育はしていなかった。ただ、公立学校は雰囲気としてはやたらリベラルだったなという思いがあります。こういう若手政治家にありがちなのが公立に行っていない。国立に行ったり、外国の大学に行ったりして、パブリックスクール・カルチャーを受けていない政治家にこういうことを言う人が多いなという気もしないではないです。たぶん公立学校は何かのそういう場所であったことは確かだろうという思いがあります。この辺はダベリに近いので、感覚としては皆さんと違うものがあるかもしれません。

▶ポップ・カルチャー

ただ80年代以降、左右両方から言われたのが無関心な若者、無邪気な若者です。右翼は「国家」と言い、左翼は「社会」と言ったが、パブリックなものに対する関心がどんどん薄れていくことを知識人あるいは指導者といわれる人たちは、左右を超えて嘆いていたことをよく思い出します。左も、栗原（彬）さんや、政治学者の中でも60年代以降は私生活主義という形で、この若者の傾向をかなり批判的にとらえる人たちが多かったと思いますが、それが一層強化されたのがこの時期ではなかったかと思います。それを大体マスコミのせいにしてきた。あるいは若者文化を批判することで、いかにそうなってきたかという説明がされてきたのをよく見てきた思いがあります。

ただ、これもいわゆるカルチュラル・スタディーズのそういうものに対する言い方として、カルチャーをハイとローに分ける。音楽でいえばクラシック、絵でいえばセザンヌとかゴッホなどをハイと考え、非常にポップなもの、ニュー・ミュージックとか若い世代がやっているものをローと見る。あるいは貴族たちが、労働者たちの読んだり見たり聞いているものをローと言ってバカにする。こういうことが時代の転換期によくあったのです。この一つの読み方は、対抗してくる勢力を政治・経済的にこれ以上抑えられないときに、しばしば文化的にそうやって区別することでその力関係を維持しようとするという解釈がよく言われます。

大衆、特にポップ・カルチャーという言い方ですが、ポピュラー、もちろん一つの読み方としてはその辺にある大衆の音楽という読み方もできるわけですが、ピープルと考えたときによりポジティヴな意味が出てくるわけです。だれが歴史の主体なのか、偉いさんなのか、それともピープル、普通の人たちなのかというところにこの議論は行き着くわけですが、そう考えたときに、必ずしも私生活主義、あるいはパブリックなものに対する若者の関心の低下ということを今までのような切り方で議論をしていてそれで済むのかなあという思いがしたわけです。

▶運動文化が生んだ価値観

一つは、戦後民主主義文化として、ある意味では

運動文化と言ってもいいかもしれませんが、弱い者が集まって何か頑張ろうとするときには、それはみんなでほめるべきだ、あるいは助けるべきだという感覚がいろんな形であったと思います。かつて「巨人・大鵬・卵焼き」という言葉もありました。「阪神・社会党・早稲田大学」という言い方もあるそうですが、弱いのだけれども、頑張るとみんながほめてくれる。よく考えてみると、弱い者は苦境のときに歴史の経験からいって必ずしも連帯をしません。弱い者は苦境においてはむしろ激しい闘いで相手を蹴落とすことが多い。差別の構造というのはそういうところがあります。

例えば、戦前戦中、自由労働者と言われた土方、日雇い関係の現場では、激しい搾取の中で、にもかかわらず彼らは親方や現場監督に向かうのではなくて、しばしば朝鮮人労働者への襲撃でその労働条件の低さのうっぷんを晴らしてきた経緯がある。弱い人たちは必ずしも苦境を脱却するために団結してというふうにはなりません。むしろならないほうが過去の歴史においては普通ではなかったか。にもかかわらず、我々がそういう価値観を持つようになったのはなぜだろう。高野時代といっても、今の教科書では、非常に政治的に左に行ってしまって、勝手に走って終わったという、無味乾燥な説明で終わっているケースが多い5年間ですが、この時代に運動文化が広がったのも事実です。

(3) 職人文化運動

▶歌声運動

きょうの朝日新聞に「『歌声喫茶』復活のきざし」という記事が載っていました。これはたぶん文化部の人で、しかも経験したことがない人が書いたと思うが、最近『青春の歌声喫茶愛唱歌全集』のCD10枚組みが出たのをきっかけにして少し店が復活しているそうですが、この記事の中には一切労働運動の話は出てきません。しかし歌声喫茶ができたのが1955年。ここには歌声運動がそのベースにあったところまでは書いてあります。

この歌声運動を広めたのは高野総評です。戦前左翼で活躍していた関鑑子という東京音大出身の有名な左翼の声楽家がいる。セツルメント運動で頑張って、彼女が戦後もう一回歌声を広めようとトライするんです。ところが実際には50年ぐらいまで泣かず飛ばずです。53年に高野がうちでやりましょうと、契約を結ぶのです。そして総評組織を挙げて歌声運動を広げます。ここから一気に実体が出てきます。そして翌年には国技館でしたか数千人を集めて、「日本のうたごえ」という一種のコンサートをやります。一種のフォーク・リバイバルです。もちろん歌集にはロシアの民謡がいっぱい入っています。バックに共産党がいたのは事実です。けれども、当時は山村工作隊の時代ですから、決してそんなに大っぴらに共産党が動ける時代ではない。高野が共産党員になるのはその後です。以前から関係があったことは事実でしょうけれども。当時右翼が出していた共産党謀略論では片づけられないだけの大きな広がりがあった。

一つの理由は、本当に身近な理由ですが、男女が一緒に何かを大手を振ってできる唯一の場所だということもできます。それからみんなの前で歌を歌うという経験は、とりわけ男には戦前はほとんどなかった。そして歌を歌って何かをするだけの客観的な政治状況が背後にあったわけです。これは単にみんなで職場で歌っていただけではなくて、メーデーとかデモでみんなで歌っていた。先ほど言った東大阪の全金横丁も、あるとき逆ピケで数人が工場に立てこもったときに、彼らは毎日きょうの日課みたいなスケジュールを立てるんです。朝は必ず歌を歌う。歌集を見ながら、インターナショナルか、わけのわからないのを日本語で歌っている話が出てきます。非常に幅広く出てきた。それを基盤にしてこの歌声喫茶がある。そのことはほとんど言われないんですが、あのとき総評がなければ日本の歌声運動は広がりませんでした。そしてこの記事はフォークがその次のケースだと言っている。何のつながりもないように書いているのですが、日本の歌声運動をバックにして労働運動は労音をつくります。

▶綴り方教室

労働者にいい音楽を提供しようという組織を全国につくります。これは60年代まで生き残るが、当時を経験している方は知っているかもしれませんが、「中津川フォーク・ジャンボリー」が60年代の終わりから日本のウッドストックのように言われた。あのプロモーターは岐阜の片田舎の中津川の労音です。大阪は特にフォークのメッカだったが、その背景には労音がいました。もちろんフォークを歌っていた人たちは、ある意味では労働運動ととりわけ70年安保の現場では激しく対立する場面があったわけですが、少なくともフォーク文化をつくる基盤としてそうした労働運動の組織があったことは事実です。あるいは独立プロ。確かに今井正はバリバリの共産党員で、山田洋次もシンパだという批判もできるでしょう。しかし、私はそれを超えていると思います。独立プロは、東宝争議ですから総評以前ですが、彼らが活発に運動し、そこにカンパを出し、それの上映会をし、一気に広げたのは総評高野時代です。山びこ学校しかり、とりわけ教組絡みでずいぶん広がった思い出があります。しかし、内容は決して組合賛歌ではない。むしろ組合批判に近いような内容が多かったと思います。

また綴り方運動がこの時代ずいぶんはやりました。これも労働者文学とか学校の現場です。なぜあそこまで私たちは作文を書かされたのだろう。受験戦争になってからやらなくなりましたが、先生が作文にえらく盛り上がって、コンクールに出すことに血道を上げていた思い出があります。当時文部省は、綴り方に対抗して作文教育を強化していました。綴り方、文章を書くというのはとりわけ地方に行くとかなり、カッコつきですが階級闘争の現場であったことは事実です。どう認識するか、もちろんこれに社会科教育がくっつくわけですが。それがどこに行ったか。

80年代の自分史ブームは突然出てきたものなのかなあとか、この辺は方法論あるいはつなげ方はいろいろあると思いますが、私は50年代前半、あるいは50年代全体を通じて日本には「弱者の連帯に正義あり」というある種の戦後民主主義文化ができただろう。戦後の労働運動とりわけ総評労働運動からかなり意識的にその場をつくり上げただろう。主体的な創造の面があっただろう。もちろんそれにいろんな環境がくっつくのは事実ですが、よく言われるような客観条件だけで説明をする。そういう民主主義運動、反戦平和とかももちろんあるわけだが、反戦平和にしても総評労働運動がなければ組織的になかったわけで、よくそういうところが全部抜け落ちて説明されるが、どっこい主体的な文化の創造運動はあっただろう。

これはとても時間もかかるし、目に見える成果はすぐ出てこないし、運動として評価は簡単にできるものではない。逆にいえば、一番長く残るものであり、代々受け継がれる可能性があり、しかもそれはある段階からひとり歩きする。

皮肉なことに、さっき言った左派の知識人たちが今日批判をしたその若者文化、実は自分たちの前の人たちがまいた種の何回目かの芽がふいたものを、自分たちで批判しているのかもしれない。もちろんこの辺は議論の余地があると思います。

▶労働文化の復活

では、再び労働運動は文化をオーガナイズできるかということですが、小山さんが話をしたような、あるいは私が指摘したような「裏日本」の労働運動がつくり上げてきた労働文化、あるいは生産現場、あるいは職人文化、あるいはそれと地域との関係とか、政治との関係とか、そういうものを今私が申し上げたようなコンテキストとつなげた場合に、また違う意味が出てくるのじゃないか。小山さんたちの運動に私が恋をしているのは、私にそういう関心がベースにあってのことだったのです。

（注）JAMとは、1999年9月9日に結成されるゼンキン連合と金属機械労組による新しい産別連合体のこと。

これは99年5月29日に開かれた第9回研究会における報告をまとめたものである